

主 題：死に勝利した者として生きる

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章50-58節

ユダヤ人の指導者であり、教師であったニコデモに、主イエス・キリストが新生について教えられた時のことをよく覚えておられることと思います。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と。この「見る」というのは「実際に目で見る」という意味ではなくて「経験する」とか「体験する」、また「参加する」とか「加わる」という意味があります。ですから、主は「神の国」、天、また天国とさまざまな言い方がありますが、その祝福を経験する、その中に入るためには新生が不可欠だと言われたのです。そして新生した者、「新しく生まれ」変わった者、救いにあずかった者たちは新しいからだをいただくのであると。そしてパウロはその新しいからだについてコリント教会の兄弟姉妹たちに教えてきたのです。この15章を通して復活の話をし、同時に我々信仰者に、この救いにあずかった私たちひとりひとりに約束されているからだがどんなものなのか、またどんな時にそのからだをいただくのか、私たちが知りたいそのすばらしい真理がこの中に記されていたのです。

#### A. 神の国にふさわしいからだ 50節

きょう私たちが見ようとする50節のところからも、また神の国にふさわしいからだについてパウロが教えています。「兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。」、つまり私たちが持っているこの地上のからだは実は天国にはふさわしくないからだだということです。パウロは地上のからだでは、誰ひとりとして天国に入ることができないと断言したのです。だから新しいからだが必要なのです。彼はこのからだを「朽ちるもの」であり、永遠ではない、滅びるものだと言います。滅んでしまうものが滅びることのない天を相続することはできません。滅んでしまうものが終わることのない永遠を、そのからだでもって過ごすことが不可能だというのは想像がつかます。

「相続」というのは神の王国を受け継ぐことを言っています。神の国を受け継ぐためには、神の国を得るためには「朽ちないもの」、つまりこの天の国にふさわしいからだを得なければならない。だから我々クリスチャンがなぜ栄光のからだ、天国にふさわしいからだに約束されていることを喜ぶかという、そこに理由があるのです。私たちは、神が約束された天国にふさわしい、神とともに永遠を生きるにふさわしいからだに約束されていると、パウロはもう一度そのことを言うのです。

#### B. からだに関する奥義 51-52節

次に、からだについての「奥義」を伝えていくのです。51節「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。」、この「奥義」ということばは、日本語でもよく使いますけれども、ミステリーやシークレットという意味を持ったことばです。つまりこれまでは人々に隠されていた、人々が全く知ることがなかった真理が神によって啓示された、明らかにされたのです。我々人間は絶対知るよしもなかった、全くミステリーだったのです。でも神ご自身がそれを明らかにしようとされたので、それが私たちの前に明らかにされたということです。だから私たちのIQが高いから知れたのではないのです。私たちは全く知ることがなかったその真理を、特にこのことばを見る時に、多くは救いの計画に関連していますが、神が明らかにしようとなさったから私たちは理解することができたのです。それが「奥義」です。パウロはコリント教会の人たちに、この「奥義」であるすばらしい神様の真理、特に復活について明らかにするのです。

##### 1. 変態 51b節 Iヨハネ3:2

51b-52節「私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」と続きます。再臨の時にどうになってしまうのか——。再臨の時、イエス様が私たちクリスチャンを迎えに来てくださった時に生き残っている私たちはどうなるのか、この「奥義」をパウロは最初に告げるのです。51節の後半に出てきたように、最初に私たちのからだを変えられる、「変態」ということです。「私たちはみな眠ってしまう」、眠るというのは肉体的な死のことです。イエス様が帰って来られた時に、生き残っていた私たちは肉体的な死を経験するののかというと、死を経験することがないとパウロは言ったのです。では何が起こるかというと、「みな変えられるのです」とあります。つまり肉体的な死を経験することなくイエス様に似た者に変えられるということです。今、この瞬間にイエス様が帰って来られるとすると、あなたも私も生きています。ではあなたも私もその瞬間に死を経験して、それからよみがえるのか——。違うと言うのです。私たちはその瞬間に死を経験することなく栄光

のからだ、主イエス・キリストに似たからだへと変えられるということです。それがこの51節の後半でパウロが言うことです。

ヨハネが「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。」、栄光の姿、栄光のからだです。「なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」、Iヨハネ3:2です。「キリストに似た者」になることが約束されているのです。そしてそのことをパウロはここで告げたのです。イエス様が帰って来られたら、生きているあなたは死を経験することなく、瞬間にイエス様に似た者に変えられると。

## 2. そのタイミング 52節

### 1) 最後のラッパが鳴る 「終わりのラッパとともに」

#### ・「ラッパが鳴る」と何が起こる？

そのタイミングについてこう言います。52節「終わりのラッパとともに」と新改訳聖書は記しています。この「終わり」というのは「最後」ということです。最後のラッパです。このことばは英語で訳せば“LAST”です。最後のラッパが吹かれる時にこの出来事が起こるのだとパウロは教えます。

#### ・「死者は朽ちないものによみがえり」

その時に先ほどとは違うことが記されています。「ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」とあります。「死者」の話が出てきます。先ほどは「死者」の話は出てきませんでした。生き残っている私たちがどうなるのかという話をしたのです。パウロは52節では「死者」の話を加えているのです。最後のラッパが鳴った時に、既に肉体的に眠ってしまった者、肉体的に死を経験した者たちは「朽ちないものによみがえり」ますと。その時に既に死んでいた人はもう死を経験することのない、滅びることのない栄光のからだをいただくのです。

#### ・「私たちは変えられるのです。」

そしてその後「私たちは変えられる」と書いてあります。既に眠ってしまった人たちも、主の再臨の時に生きているすべての人もみんな変えられるのだと。イエス様に似た者に、栄光のからだへと変えられる。もっと言えば神の国にふさわしいからだに変えられる。それが起こるのが最後のラッパが吹かれた時であると。

実はこの真理をパウロはテサロニケの手紙の中でも教えています。Iテサロニケ4:16「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」、つまり死んだ者たちがそのラッパとともによみがえり、「次に、生き残っている」、主の再臨の時に死を経験していない生きている者たち、「私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」と教えています。最後のラッパが鳴り響いた時に既に亡くなっていたクリスチャンたちも、生き残っているクリスチャンたちも一瞬のうちに変えられて主にお会いするのだと。

### 2) 瞬きのうちに

52節で注目していただきたいのは、「たちまち、一瞬のうちにです」と書いてあることです。

#### ・「たちまち」

この「たちまち」という形容詞は「突然に起こる」ということです。

#### ・「一瞬のうちにです。」

「一瞬のうちに」というのは、私は結構好きなのですが、まばたきのうちにということです。なぜなら「一瞬」の「瞬」は「まばたき」です。人がまばたきをするような、本当に短い間、その時間の短さを教えています。つまりパウロがここで教えてくれるのは、例えばイエス様が帰って来るのをみんなが見ていて、「ほう、イエス様、帰って来たわ」と、「準備しなきゃいけないわ」というようなものではないということです。この出来事は「一瞬のうちに」、まばたきをするような短い間にすべてのことが起こる。イエス様が帰って来られて、私たちは「一瞬のうちに」イエス様のもとに引き上げられる。だから私たちは悠長にイエス様が帰って来るのを見ながら、何かをする時間があるかと言うと、そうは記されていない。すごく待ち遠しくありません？あっという間に私たちは主のもとに引き上げられるのです。あっという間に私たちは主の御顔を拝すると。この地上の生活から完全に解放されて、栄光のからだをいただき、私たちの主とともにその後永遠に過ごしていくのです。まばたきのうちにこれらの出来事が起こるのだと。

## C. 預言の成就 53-57節 再び「変態」について教える

### 1. 新しいからだを着る

#### 1) 朽ちる者は、「必ず」朽ちないものを着なければならない。

53節から見ていくと、パウロが今まで話してきた復活の出来事に関することは、まさに預言の成就

なのだというのです。そしてもう一度このからだが変わられることについてパウロは教え始めます。

「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。」とあります。少し見ていただきたいのは「必ず朽ちないものを着なければならず」とあります。その後「必ず不死を着なければならぬ」と書いてあります。非常に大切なのは、この「ならず」とか「ならぬ」というのは同じことばなのですが、これは「神様の定めによって～するように定められている」という意味を持ったことばが使われています。ということは、「朽ちないもの」と「不死」を「着なければならず」、「着なければならぬ」と、このふたつのものを着るように神によって定められているとパウロは言っているのです。しかも53節の一番最初に出てくることばが、この「ならず」と「ならぬ」と記されている動詞なのです。なぜかという強調しているからです。パウロは神の国に入るためには、神によって定められたこと、絶対に必要なことが何なのかを記してくれたのです。つまり「朽ちるもの」——滅んでしまう人間は、必ず「朽ちないもの」、つまり滅ばないものを着なければならぬということなのです。

## 2) 死ぬものは、「必ず不死を着なければならぬ」

「死ぬものは、必ず不死を着なければならぬ」、死なないものを着なければならぬのです。「着」ということばは一般的には「洋服を身に着ける」という意味を持ったことばです。ですからパウロは神の国に入るためには、それにふさわしいからだを着ることが、洋服を身に着けるように着ることが絶対に必要だ、着なければならぬと言うのです。「朽ちるもの」や「死ぬもの」のままでは神の国に入ることができないと、パウロは改めてこのように記してくれています。

## 2. 預言の成就 54-57節

それを記した上で、54節「しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、『死は勝利にのまれた。』とするされている、みことばが実現します。」とあります。罪人が救いによって新しいからだを着る時に、主の預言が実現する。54節の「『死は勝利にのまれた。』とするされている」、その聖書箇所はイザヤ25:8です。そこには「永久に死を滅ぼされる。神である主はすべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。主が語られたのだ。」と書かれています。「死」に関する完全な解決の話です。私たちにとってどうすることもできなかった「死」という敵に対して完全な勝利が与えられるとイザヤが言ったのです。人間は「死」という恐怖と戦い続けています。今もこういうコロナ禍にあって、病気ではなくて不安からいのちを断つ人がたくさん増えている。心が病んでしまっていると。日本だけではない、世界的にです。というのは不安があるからです、恐れがあるからです。

この「死」という私たちがどうすることもできなかった敵に対して我々ができることは、またできたことは何かと言うと、その「死」について考えないことでした。そういうことを一切忘れる。だから私たちは数字でも4であるとか、「死」に関するナンバーを徹底的に忌み嫌っています。恐ろしいからです。しかもどうすることもできないからです。できることはただひとつ、そういったことを考えないようにする、そういったことを忘れてしまうことです。しかし、イエス様を信じているあなたは別なのです。イエス様を信じているあなたは、この「死」に対して完全に勝利したのです。「死」という問題をあなたは完全に解決したのです。なぜかというイエス様がそのみわざをなしてくださったからです。世の中の神を知らない人たちと同じではないのです。「死」という問題は、私たちにとってもう解決済みなのです。そのことをこの後パウロはまた繰り返し教えます。

### ・「死よ。お前の勝利はどこにあるのか。」 55節

55節「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」と。これは旧約聖書のホセア13:14からの引用です。「わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。」と書かれています。55節を見ると、「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか」、このことばを口にしている人物の姿を思い浮かべることが出来ますか。「死」に対して完全な勝利をした人がこんな宣言をするのです。これまで私たちを苦しめ、私たちを絶望に追いやってきた「死」、どうすることもできなかった「死」に対して「おまえの勝利はどこにあるのか」と。この「死」はもう私たちに対して勝ち誇る事ができないのです。この敵に対して完全に永遠に勝利を得たからです。

### ・「死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」 55節

そして「死よ。おまえのとげはどこにあるのか」と続きます。「とげ」というのは痛みをもたらすものです。悩ますものです、苦しめるものです。ですから私たちは「とげ」のある花、例えばバラを扱う時に注意を払います。「とげ」に刺されると痛いからです。でも、パウロは「死よ。おまえのとげはどこにあるのか」と言うのです。もう「死」は私に痛みをもたらさないと言うのです。かつては「死」を考えるだけで不安に陥ったけれども、今の私はこの「死」によって痛みを感じることはない。よく聞くように針を刺して抜けてしまったミツバチは怖くない。もう刺される心配がないからです。「死」も全く同

様だと。もう私たちに恐れや不安をもたらすことはできないのです。これまではそうでした。でももうその不安も恐れも私たちから全く無縁のものになってしまった。なぜならば、「死」の「とげ」はイエス様によって取り除かれたからです。イエス様がそのすべての「とげ」を取り除いてくださったから。

「死」という問題はあのイエス様の十字架と復活によって完全に永遠に解決したのです。

・「死のとげは罪であり」 56節 ローマ6：23、Iヨハネ2：12

パウロはそのことを56節に続けて語ります。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」と。何を言っているかということ、「死」という「とげ」は人間の罪によってもたらされたものなのです。「死のとげは罪」だと。人間が罪を犯すことによって、「死」という「とげ」を私たちは得たのです。思い出してください。アダムが罪を犯すことによって、すべてのものが例外なく死ぬ者になりました。「罪から来る報酬は死」だとパウロはローマ6：23で言いました。罪を犯した者はみんな必ず死ぬのです。それは罪の結果だからです。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」、ヘブル9：27です。なぜ私たちが死ぬのかということ罪の結果だとパウロは言います。「死のとげは罪」だ、罪によってこの「死」という「とげ」が存在するようになったと。

しかし、この「とげ」である罪がもう除かれたのです。私たちがイエス様を信じたら死なない者になったのではないのです。現実には日々私たちの肉体は弱っていくのです。現実には日々肉体的な死に向かって行っているのです。ですから「死」が除かれたのではないのです。「罪」が除かれたのです。ですからヨハネもIヨハネ2：12に「子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。」と言っています。私たちは罪を赦していただいた。ですから確かに肉体的に弱って行って、ひょっとしたらこの地上での「死」を経験するかもしれない。でももう既に何回も見てきたように、それで終わりではないのです。もう私たちに新しいからだがある約束されたのです。その新しいからだを持って、私たちはそれにふさわしい天へと確実に導かれているのです。ですからパウロが言うのは、「死のとげは罪」だと。残念ながら「罪」によって「死」という「とげ」が与えられてしまったと。

・「罪の力は律法です」 56節 ローマ4：15

次に、「罪の力は律法です」と続くのです。恐らく私たちがイエス様を知らない人たちと話をして、あなたは罪人ですと言った時に、聖書の言う罪人と私たちが考える罪人には確かに違いがあります。でもすべての人は自分のうちに悪が存在していることは納得できるはずで。なぜかということ、もうそれは自分の生活の中でみずからが経験していることだからです。おもしろいと思いませんか？罪から来る罪悪感を持って生きているのは我々人間だけです。ほかの動物にはそんなことはないです。なぜかと言うと、我々人間にだけ神は良心というものを下さっているからです。これをしたらだめだというのはもちろん人から教えられるのですが、生まれつき私たちのうちに備わっていませんか？だから幼い子どもたちがにこにこしながら自分のやりたいことをする時に、どうして親の顔をうかがうのかと言うと、やってはいけないことだどこかで感じているからです。でもやりたいからやろうとするのです。

何か間違ったことをした時に、あなたのしたことは正しくないと私たちの心が責めます。つまり完璧ではないのですが、心の中に善と悪を判断する基準が我々人間には備わっているのです。だからみんなに嘘をつくことは罪ですよ、盗みをするのは罪ですよと教えられて、え？そうなんですか？ではなくて、正しいことをしていないと我々の心が責めるのです。我々人間にはほかの動物が神様から与えられなかった良心というものがあるのです。だから人間はさばきというものに対して恐れを抱くのです。信じるか信じないかはともかくとして。もしさばきがあったら自分はさばかれてしまう、そういう恐怖を持つ。だから人間は死と同じように忘れようとするのです。考えないようにする。だから人間は死を恐れている。その死の後にさばきがあることを知っているからです。でも信じたくないのです。

こうして私たちは良心によって自分が罪を犯しているということに気づくのですが、もう一つパウロが言うようにそれが律法なのです。「罪の力は律法です」と言いました。神様から与えられた律法によって私たちは自分が罪人なのだと知ることなのです。少し思い出していただきたいのは、律法とは何かということ。律法というのは、神様の基準、神様のみこころを明示したものです。これが私の願っていることだ、これが私の喜ぶことだ、これが私の喜ばないことだと神の基準を明らかにしてくれたのです。その神様の基準と自分のしていることを照らし合わせると、その基準からどれほど自分が逸脱しているかということに気づかされます。だから、みんなしたくないのです。でも律法を見て、神の基準を見た時に自分がその基準からどれだけ逸脱しているのか、そのことに律法が気づかせてくれる。

私たちは“罪”ということばをよく使います。“罪”というのは「的を外す」とか、「正しい道から迷い出る」という意味を持ったことばです。つまり創造主なる神が示されたご自身のみこころ、被造物である私たちが服従すべき神の基準から完全に外れてしまっている、創造主なる神のみこころから外れている、それがこの“罪”ということばです。ですから私たちは罪人だと言った時に、神の基準から外れ

ている、その神の基準とは何か、律法が明確にしてくれたのです。ですから律法を見る時に、確かに私は神の基準から外れている、神が私に望んでおられる歩むべき正しい道から外れてしまっている。だから私は神の定義に基づいて罪人だと言うのです。

私たちは、神様の意図するみこころから外れている。自分に正直な人はそれに気づくのです。私たちが気づかなければいけないのは、神様のみこころから外れているのはみずからの意思によって外れているということです。自分が神のみこころに逆らうという選択をしているということです。どういうことかと言うと、私たちは正しいことを教えられて、本当にそうだなと思ったら間違ったことをやめて正しいことをしようとしませんか？たとえ正しいと言われたとしても、それが自分がやりたくないことだったら我々はそれをしようとしません。つまり神はこういうことをあなたや私に望んでいる、これが神のみこころだ、これが神の基準なのだ、これに従いなさいと言われた時に、もし本当に従いたいと思っている人だったら従います。でも私たちはそんなことを幾ら聞いても従いたくないのです。我々はみずからの意思で神のみこころに背いて自分のやりたいことをしているのです。ですから誰かのせいではなく、自分の意思で私は罪人であり続けているのです。

ですから、律法によって私たちがいかに罪の力に支配されているのか、罪の奴隷なのか、私たちは罪の力から自分自身でどうすることもできない、逃れることもできない存在だということを明らかにしてくるのです。パウロは「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません。」とローマ4：15で言っています。また3：20の後半には「律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」とあります。「律法は怒りを招くもの」だというのは、神の基準に違反しているからです。神のみこころを無視して好き勝手に生きているならば、私たちは神の怒りを自分の身に招くのです。必ず神様の報いがやって来ます。当たり前の話です。ですからこの律法によって、私たちがいかに罪深い存在であり、罪の奴隷であり、罪の力にはどうすることもできない存在だということが明らかになると言うのです。私たちは朽ちるものだし、滅んでしまうものだし、我々はひょっとしたらいつか死を経験する。あえてひょっとしたらと言うのは、そのすべては主の再臨の時にかかっているのです。でも少なくともあと50年ないとしたら、ここにいるほとんどの皆さんは肉体的な死を経験するのです。滅びるものであり、死を経験するものです。しかも私たちはこの創造主なる神様に徹底的に逆らい、その方に背いている存在だと。

#### D. 主への感謝 57節

・「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました」 IIコリント2：14、Iヨハネ5：4

そういうことを明らかにした上で57節、パウロは主への感謝へと読者たちを導くのです。「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」、きょう何回も見て来たように、イエス様の十字架での身代わりの死と、敢然と肉体を持って死からのよみがえり、この十字架と復活によって完全に罪に対する勝利を神は備えてくださった。不完全ではないのです。完全な罪に対する勝利です。そしてその救いに招かれた時に、我々では決して勝利を得ることがあり得ないこれらの敵に対しての勝利を得たのです。パウロはIIコリント2：14に「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。」と言っています。「キリストによる勝利の行列に加え」てくださると。私たちはもう敗北者ではないのです。敵に勝利した將軍は勝利のパレードをしたのです。私たちはその行列に加わっているのです。罪に対しても、死に対しても、永遠のさばきに対しても、もう私たちは完全な勝利を得たのです。なぜなら主イエス・キリストが私たちの罪を、その「とげ」を除いてくださったからです。

「私たちに勝利を与えてくださいました」、このことばを見ると、勝利を得るために努力しなさいとパウロは教えていません。57節で勝利はもうあなたのものなのだと述べています。繰り返しますが、勝利は既に十字架と復活によって得られたのです。しかも、この「与えてくださいました」という動詞は現在形で使われています。このすばらしい祝福を主は私たちと同じように信じる者に与え続けてくださるのです。もうその扉が閉じられたわけではないのです。少なくとも我々信仰者はこういう感謝を持って与えられた一日一日を歩いていくことができます。なぜならもう行くところは決まっているのです。決まっていなくて不安でいろいろな恐れを抱きます。もう行くところが決まっているのです。何を心配するのですか？どんな病がはやろうとも、我々にできることはもう限られているのです。できるだけのことをして神に感謝しながら歩み続けることです。そんな生き方は私たちしかできない。ただそんなふうに自分を納得させようとしているのではない。それがパウロの生き方でした。それが勝利をいただいた信仰者であるあなたや私の生き方です。もっともっと神をほめたたえながら、感謝しながら生きるのが私たちであってしかるべきだと思いませんか？

## E. パウロの勧め 58節

最後に58節で、パウロは勧めを与えます。「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。」と。「ですから」ということばが出ています。「それだから」と。つまり今まで話してきたことすべてを受けて、今まで話してきたことすべてが事実だからと。パウロが何を話してきたのか——。復活でした。パウロが言いたいのはこういうことです。主イエスが死からよみがえられたという事実は我々も同様によみがえるということを証明したのです。イエス様が死からよみがえってくださった。それを記念して私たちはこうして日曜日の朝集まっているのです。この日は主イエス・キリストの復活を記念しているのです。イエス様が死から敢然とよみがえられたこの事実は、あなたも私も必ずよみがえることを証明したのです。

またイエス・キリストが死から霊ではなくてからだを持ってよみがえられたという事実は我々キリスト者も新しいからだ、天国にふさわしいからだを持ってよみがえるのだということを証明したのです。イエス様はよみがえったけれども、霊だったら誰も見ることはできません。霊だったら触ることができません。だからみんなそのことを質問したのです。イエス様はパンを持って来なさいと言って食事を一緒になさった。トマスがその手の傷に指を入れて、脇腹のやりの跡に手を入れてみなければ私は信じないと言いました。この目で見なければ、この手で触れてみなければと。イエス様はやってごらんなさいとトマスに命じました。イエス様は肉体を持ってよみがえられたのです。ですからイエス様がよみがえられた肉体を見る時に、そこから私たちはいただくからだがどんなものか推測することができるのです。イエス様がからだを持ってよみがえられたという事実はあなたも私も新しいからだを持ってよみがえることを証明してくれたのです。

パウロがその話をして「私の愛する兄弟たちよ」と言うのです。復活が事実であることを受けて、コリント教会に次の二つのことを勧めるのです。

### 1. 忠実であり続けること

「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。」、忠実であり続けなさいと。「堅く立って、動かされることなく」、「堅く」というのは「不動の」、「揺り動かない」ということです。「動かされる」というのは「移り動く」とか「揺るがない」とか「しっかりした」ということです。どんなものに対しても、どんな感わしに対しても、感わされてはいけません。主の真理にしっかりと立つことである。真理に根を下ろすことであると。コリント教会の問題は実はそこにあったのです。パウロから教えを受けてきたけれども、いろいろな教えに感わされていきました。だから復活の話聞いていながら、復活を信じていない連中が教会にいたのです。だから幾ら聞いても真理にしっかりと根を張らず、ただ聞くだけで終わってしまうのです。そういう人は信仰的に大変弱い人で、いろいろなことに感わされてしまう。私たちがしなければいけないのは、神が何を言っておられるのか、その真理をしっかりとつかむことです。そしてその真理にしっかりと自分の信仰を置くことです。

その上でパウロは「いつも主のわざに励みなさい。」、主のわざ、主の働きに励みなさいと言います。おもしろいのは、この「励みなさい」という動詞は新約の中に39回出てきます。この「励みなさい」ということばは「豊富になる」とか「大量」とか、量を意味することばです。このことばは、期待されているよりも多くのこと、そういう意味を含んでいるのです。実はこのことばは神の恵みに対して使われているのですが、エペソ1:8「神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、」の「あふれさせ」ということばと同じです。私たちが期待しているよりもはるかに多くの量、それが神が私たちに下さった恵みだと言うのです。神の恵みというのは、私たちの想像を超えているのです。ということはパウロがここで何を言いたかったかということ、あなたは主の働きに対していい意味で貪欲でありなさいと言っているのです。決してできることをするような信仰者であってはいけません。自分のできることをしているのですから、神の助けが要らないでしょう？それは信仰ではない。できることをするのは、神がせよと言うことをするのです。そこには信仰が要ります。なぜなら心の中ではそんなのできないと言うからです。私たちがそれぞれに与えられた霊的賜物を用いて主に仕えていくこともそうです。主の命令に従っていくことも私たちの努力や力では無理なのです。ですから我々信仰者というのは、主の助けをいただきながらその働きをしていくのです。

我々は主を信頼することを学び続けると何回も繰り返し皆さんにお話ししているのはそういうことです。できないけれども、主がやれと言うのだからやります、できないという不安はあるけれども、神が重荷を下さって、このようなことをしたいと思っている。その時に私たちがすることは、主よ、あなたが望んでおられることを私はやりたいから助けてください。そうして主に信頼することを学ぶのです。そしてそのように主に信頼する人を神は用いてくださるのです。多くの信仰者はできるかできないかを判断してできないことはしないのです。だからいつまでたっても信仰は成長しないのです。なぜかということ、神があなたを通して働かれるチャンスを神にお与えしないからです。そんな信仰者であってはい

けない。パウロはそんなことを言っていないのです。期待されているより多くのこと、できる、できないではないのです。神がやれと言うことを喜んでやろうとするのです。しかも、積極的にです。

ですからこの「励みなさい」と訳されている日本語は命令ではないのです。強制されてすることではないからです。自主的にすることだからです。そうやって我々は生きているのです。主のためにすべてのことを自主的にすることです。主に喜んでいただきたい、そのことを願いながらすべてのことをすることです。周りの兄弟姉妹たちの徳となることを願いながら一生懸命やっつけようとする。私たちが考える以上のことを、犠牲的に、貪欲にやっつけようとするのです。

## 2. 主のさばきを覚えること

最後にこう続きます。「あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」と。二つ目にあなたたちが覚えなければいけないこととしてパウロが勧めているのは、主のさばきを覚えなさいということです。この「労苦」ということばは、今私たちが見てきたようにできることをしているような、そういう意味ではないのです。これは大変な苦痛や苦勞が含まれています。パウロは喜んで犠牲を払いながら、一生懸命苦しみを経験しながら主に仕え続けたのです。主を信じて主に従っていく生活にはいろいろな迫害が伴います。言うまでもない、そして既に我々が見てきたようにパウロたちは大きな迫害を何度も何度も経験していました。実際にパウロはこのⅠコリントが記されて十一年か二年たってからローマで殉教して行きます。恐らく紀元67、8年ぐらいだと思います。最後の最後まで主に対して喜んで貪欲に犠牲を払い続けるのです。

なぜそういう生き方をしたのかと言うと、そういう生き方が「主にあってむだでないことを知っている」からと言っています。もし復活がないのであれば、パウロたちのように生きる人々の人生は大変むだな人生です。あるクリスチャンの団体は2010年代にクリスチャンで殉教した数は80万人、2000年代は160万人と言っています。遠い昔2000年前のネロの時代の話をしているのではありません。我々が生きている今、同じ時代にあっても多くのクリスチャンたちが迫害されています。特に今教会への攻撃というのは世界的に大変ふえています。ある統計によれば500%ぐらい上昇した。特に中国においてです。イエス様を信じ、イエス様に従い、いろいろな迫害を受けて殉教したと。もしキリストの復活が事実でないとしたら、こんな人生は最もみじめな人生です。人生をむだにしたのです。しかし、復活が事実である以上、そういう人生は決してむだではないとパウロは言います。かえって主から褒めていただける、主からの報いをいただくことになる。

「ですから、私の愛する兄弟たちよ。」、信仰者たちよ、キリスト者たちよ、「堅く立って、動かされること」がないようにするだけではなく、「いつも主のわざに励」めとパウロは教えます。すべてを主の力で、主のためになす労苦は主にあって決してむだではない。それは決して愚かではないと。それは無価値で空虚な人生では決してないと。それこそが主にお会いした時に、主ご自身が喜んでくださる人生だと。信仰者の皆さん、これがパウロの勧めです。

我々が立たなければいけないのは、イエス様が死から敢然とよみがえってきたという事実です。パウロを変えました。多くの信仰者たちを変えました。なぜなら彼らは実際にイエス・キリストの復活を見たからです。そして彼らはいのちがけで言うのです。イエス様はよみがえって来た。そしてこのよみがえりこそがイエス様を信じるあなたや私に素晴らしい希望をくれた。ではそういう希望をいただいた者として我々はどうやって生きていくのか——と。主のわざに励み続けろと。しっかりと主に従い続けなさい、主のみことばに従い続けなさいと。私たちがしなければいけないことがあるのです。キリストの福音を伝えなければいけない。弟子を作っていかなければいけない。すべて大命令です。そんなことしていないと言うクリスチャンも多いでしょう。目を覚まさなければいけないのです。私たちがイエス様の前に立つその日が近づいている。時間も富も才能もすべてを用いて主に仕える人生、その人生こそが価値ある人生だと。そんな人生を生きなさい、それがパウロの勧めでした。そんなふう生きて行きましょう。キリストの復活が事実であるということをそういう生き方が証明するのです。そのような信仰者として、この1週間もしっかりと主に仕えてまいりましょう。